

詩編 8 編は天地万物の創造者なる神を賛美しますが、9 編は人間と世界の歴史における「審判者」としての神がテーマです。野球であれ、サッカーであれ、相撲であれ、スポーツの試合には、公平に試合を運ぶジャッジ、あるいはレフリーが不可欠です。私たちの日常の極些細な事柄において、正しい審判こそ私たちの社会の成立要件です。しかし、そのような正義と慈しみの審判はどこにあるのでしょうか。それが、私たちの嘆き・悲しみ、叫びです。まず、詩編 9 編を読みましょう。

・審判者としての神：5 節には、「あなたは御座に就き、正しく裁き/わたしの訴えを取り上げて裁いてくださる」と言われ、8 節 - 9 節には、「主は裁きのために御座を固く据え/とこしえに御座についておられる」とあります。「とこしえに御座についておられる」とどっしり構えて、世界を裁いて下さる主なる神が告白されています。天皇を含め地上の諸々の王は本当の王ではなく、「ただの人間」です。(21 節)「根拠なき全能感」を持つ為政者たちは危険であり、滑稽です。17 節、20 節にも「さばき」が言及されます。ヘブライ語の「ミシュパート」(審き)は私たちの信仰の鍵語です。ホセア 2:19 は「正義(ツエデク)と、公平(ミシュパート)と、いつくしみ(ヘセド)とあわれみ(ラハミーム)とをもってちぎりを結ぶ」と言われ、エレミヤ 4:2 では「真実(エメト)と正義(ミシュパート)と正直(ツエデカー)とをもって」と言われています。公平・正義と翻訳されるミシュパートは、人間同士、そして神との関係における公正な関係のことです。主なる神は、私たちの正しい訴えを助け守られ、抑圧された者たちを心に留め、苦しむ者たちの叫びをお忘れにならないお方です。

・主に感謝し、喜び、歌う：だからこそ、主に感謝し、喜び、楽しみ、み名をほめ歌うことが信仰者の応答です(2-3 節)。9 編は「感謝と喜びの歌」です。心を尽くして「感謝し」と言われていますが、本来の意味は、自由に、オープンに告白するという意味です。「語り伝えよう」の基本的意味は、数え上げ、書き記すということです。神がなして下さったことをしっかり数え上げ、心に留めましょう。むろん、この世界の出来事は過酷です。東日本大震災・津波、原発事故、各地の地震と風水害、そして、コロナウイルスです。ことを決め、行う政治・行政は右往左往しているように見え、経済も全く不透明です。聖書はそのような人間的な疑問や呻きを無視していません。そのただ中で 3 節では「あなたによって」(口語訳) わたしは喜びかつ楽しみ、あなたのみ名をほめ歌います」と言います。決して「私によってとか」、「新聞、テレビなどの世の中の基準によって」とは言っていないのです。

・「審き」を主なる神に委ねる：私たちは世界の主でも、私たち自身の主でもないのです。ですから、自分を、そして、他者を自分の経験や自分の正義観で裁くことを避け、最終的な審判者である神に委ねましょう。そして、やれる限りのことをやりましょう。自分と隣人を愛しましょう。

・嬉しいことに、「主は流された血に心を留めて/それに報いてくださる。貧しい人の叫びをお忘れになることはない。」(13 節)、「乏しい人は永遠に忘れられることなく、貧しい人の希望は決して失われない。」、「虐げられている人に/主が砦の塔となり、」(10 節) 主を「尋ね求める人は見捨てられることがない。」と歌われています。 どっしり座わっておられる主よ、「立ち上がってください！」